

「考える」を目指した学修支援体制の構築 —麗澤大学におけるライティング支援室の取り組み—

麗澤大学日本語教育センター長・准教授 正宗 鈴香

MASAMUNE Suzuka

キーワード：ライティング、学修支援、自主的学習

1. はじめに

日本の大学に在籍する留学生に対し、どのような教育を行うかについては多様な視点からの様々な議論があると思うが、学生が学習に主体的に取り組めるような組織的な仕組みづくりに関する議論も重要であろう。

2013年3月に公表された大学分科会大学教育部会の「審議まとめ」の提言からは、教育内容の高度化に対する方策についての強い問題意識を読み取ることができる。この3月の「審議まとめ」に関し、瀧澤(2013)は「教育の内容そのものに踏み込み、授業方法や自主的な学習時間の確保など学修の質を高めるための具体的な方法などが提言の中心を占めている」としているが、これは、今日の大学教育において、教育の質の保証・向上のために学生が学習に取り組むような仕組みづくりを構築すること、また、主体的な学修時間を確保するための授業を提供することが求められていることと言える。

学修時間という点では、現在の単位制度は授業時間の3倍の学修時間を前提としており、1単位は45時間の学修時間が期待されている。機関によって授業時間が異なるので一概には言えないが、目安としてこれは一週間に3時間程度の学修が期待されていることになる。また、この学修時間を確保するためには、学修時間を確保するような学修指導、学修支援および学修環境の整備等が必要であると瀧澤(2013)は指摘している。言うまでもないが、これまでも教師は宿題プリントや小テストのための勉強の指示、予習、復習といった形での学修指導をしてきており、授業時間外の学生の学習の取り組みをおろそかにしてきたわけではない。しかし一方で、科目の特性によっては、学生自身が授業時間外に何にどう取り組めばいいのか明確でないものもあり、それまでの個々の学習経験では進められないこともある。このような場合は、学期を通して、教授過程を体系化した上での学修指導や学生の立場にたった学修支援環境を用意して学生に主体的に取り組ませる仕組みが必要となると考えられる。

本学の留学生対象の「日本語作文演習」⁽¹⁾では、従来の授業方法では主体的な学修に結びつきにくいことが課題となっていた。その改善策として、授業とライティング支援室(以下、支援室)を組み合わせ、留学生の学びにつながるような学修支援体制の構築を6年前から取り組み始めた。本稿では、その体制を紹介するとともに支援体制の構築に向けての課題についても考えることにしたい。

2. 「書く」授業での課題

文章を書く力を育成することは、教育において長年取り組まれていることであるが、「書く」力をどうつけるかについては様々なアプローチがある。大井(2002)は、アメリカの作文指導者であるレイムズ(1983)が指摘する「作文は考えを表現することであり、作文は思考を意味する」をいう考えをもとに、「書くこと」の育成では「考える力」に働きかけるような指導が重要としている。

本学の日本語教育センター(以下、センター)での「書く」授業では、教師が学習者の文章の問題点を指摘し、それに対する直し方を提示し書き直しをさせるという指導が長らく続けられてきた。評価についても最終的に出来上がった文章を対象とすることが多く、修正を繰り返した過程での学びについての評価はさほど重視しなかった経緯がある。しかし、このような指導では、学生は教師に言われたことをそのまま書いて「きれいな文章」を提出することを目指してしまい、自分が本当に表現したいことを追及する姿勢を持たなかったり、「書く」ことに対し受け身になったりすることに本学は問題意識を持った。また、授業中の個別指導において、なぜその文章を書いたのか理由等を聞いてもすぐに説明ができないことが多く、書き手の考えを聞いた上での助言や指導をしようにも授業内でやるには時間的な制約もあった。

そこで、「書く」とは書き手の考えを適切な構成に従って表現することであり、「書く」力の育成は、何をどう表現したいかを書き手が考えることに継続的に働きかける指導や支援により達成されるという指針をたて、授業と支援室が連携する形での学修体制が有効と考えた。

3. ライティング・センターの理念と支援

ライティング・センターは、1960年代にアメリカで発足したもので、現在は欧米を中心に多くの大学が学修支援制度として設置している。今日のアメリカでのライティング・センターは、1980年代に“Writing as a Process”、つまり、ライティングを過程において指導する、という考えのもとで発達したとされている。日本においてもこの10年でライティング・センター⁽²⁾を設置する大学が増えているが、多くの大学はアメリカでのライティング・センターの理念を継承しつつ、それぞれの機関に合わせた方法で運営していることが報告されている。その中で、留学生を対象としているのは、本学を含め5校⁽³⁾である(松田 2012)。佐渡島(2009)は、アメリカでのライティング・センターの理念を(1)ライティングを過程において指導する、(2)紙を直すのではなく、自立した書き手を育てる、(3)添削をしない、としているが、本学においてもこの理念をもとに日本語非母語話者である留学生の特性に合わせた本学独自の学修支援システムの構築を目指している。

4. 麗澤大学日本語教育センターにおけるライティング支援室の概要

4-1 ライティング支援の特徴と他者との対話の重要性

支援室での支援の特徴は、自分が書いた文章について、他者との対話を通して客観的に捉える機会を得ながらよくする点にある。書き手は授業で課題を与えられてから

完成するまで、様々な過程を踏みながら書き進める。この過程には、書き始める前のブレインストーミング、情報収集、実際に文章にする、組み立てる、推敲するといった多くの作業が含まれるが、書き手は常に問題点の発見、多角的な視野に立って自分の考えを修正しながら書き進めることが要求されると言える。支援はどの過程においても受けることができ、書き手は他者(日本語話者)が対話により介入することで、自分の文章の問題点の発見や多様な視点から考える機会を得ることが可能となる。支援者(以下、TA⁽⁴⁾)は、読み手の反応としての文章に対する疑問や感想などを書き手に伝え、書き手はそれに答えたり読み手の反応を知ったりすることで、書き手、読み手の両方からの視点や意見を吟味しながら文章の質を向上させる。このように本学の支援は、書き手に日本語で考えるきっかけを与えることを目的としている。従って、TAは自分の考えを押し付けたり書き手が選択しようとしたりしている考えを遮ることをしないよう十分に留意する必要がある。また、書き手が考えたりまとめたりするのに時間がかかるとしてもそれを十分に引き出すまで待つことも大切である。本学の場合は、基本的に毎週支援室に行って支援を受ける授業内容となっているため、一週間の学修時間については、支援室に行く前の準備に30分程度、支援室で45分、支援を受けたあとに自分の考えを整理して文章を書いたり資料を読んだりするのに100分程度というのが一つのモデルとして考えられる。

4-2 ライティング支援室の支援で目指すこと

本学のライティング支援室での学修支援は、授業時間内での指導や学習の延長上にあるものとして位置づけられている。授業時間内での学習と授業時間外で学生が進める学習をつなげる役割を担い、学習項目ごとに設定された学びの到達に向けての支援を行っている。このような学修支援を成り立たせるためには、授業、学生、支援体制がそれぞれの役割を意識し一連の活動や学びの目的を共有することが不可欠となる。

4-3 運営方法

本学の支援室は、2008年度からの3年間の試行運用期間を経て、2011年に正式な組織としてセンター下に設置された。支援時間はセッションと呼ばれ、2013年1学期は、月曜日から金曜日まで、5日間のうち3日間は午前中から午後6時まで、2日間は午後1時半から6時まで、45分のセッションを合計90セッション提供している。セッションは予約制で支援室の外に貼り出された予約表に自分の名前とクラスを書き入れるシステムになっている。支援室では、各学生のフォルダーが用意され、セッションごとにTAが支援内容の報告書を作成し、学生のメモとともにファイルしてクラス別⁽⁵⁾に鍵付きのキャビネットに保管している。この報告書はTAが支援前の準備として閲覧するほかに、教師も支援状況を指導に反映するために活用する。また、支援を受ける際、受けたい支援や授業内容について説明できる学生ばかりではないことから、教師は授業で配布したプリント類を授業用フォルダーにファイルしておき、TAが閲覧しながら支援を行えるようにしている。支援は、文章の内容をよくするためのものであるため、文章の添削はしないことを徹底し、文法などの言語面の不自然さの指摘はするが直しはしないことを基本としている⁽⁶⁾。

なお、支援対象となる文章はセンター開講科目の授業で出された課題に限定されているため、その他の授業、例えば学部の教養科目などで出された課題で書いている文章は支援を受けることができない。

4-4 支援者 (TA)

質の高い支援を提供するには、TAの粘り強い姿勢と支援能力、意識の高さが欠かせない。本学のTAは、麗澤オープンカレッジ (ROCK) の「日本語支援ボランティア養成講座(通年24コマ)」の受講修了者で、ボランティアとして支援を担当している。現在、16名のTAで運営しており、このうち7名が立ち上げのときから6年間関わっている。TAは、文章の教授法を専門としたり支援に対する特別な訓練は受けたりしていないが、学期ごとの打ち合わせや反省会、日々の情報交換などを通して支援のスキルやストラテジーが構築されてきている。新しく加わる際には、支援室の理念、主旨、支援方法などを説明し、支援体制の理解と賛同を得てからセッションを担当してもらっている。地域の方に協力してもらう体制は、教室の外でも多くの日本語話者に接する機会を作るというセンターの方針と本学の講座で学んだ受講者に活躍の場を提供するというニーズを一致させたものである。TAには、学期開始前に支援可能日を提出してもらい、調整を行ったのちは学期を通してその曜日の時間帯には予約があってもなくても支援室にいるという取り決めをしている。

5. 支援室運営の課題

5-1 授業担当教師の理解の必要性と評価

支援室を運営するにあたり、まず課題となるのが、授業担当教師の学修支援に対する理解と支援室活用への協力が得られるかである。支援を組み入れる場合は、教師以外の第三者がTAとして介入することを念頭に入れた授業の組み立てや、支援が入った場合の評価をどう考えるかといった課題が発生する。授業時間内で教授した範囲での学生のパフォーマンスを期待する教師もいるため、すべての教師から賛同を得られるとは限らない。組織として学修支援の仕組みを作るのであれば、支援室と教師での合同勉強会や説明会等の開催をして十分に理解を得る必要がある。学生の文章が支援を受けた結果の文章であることを教師が知らずにいることは間違った評価や適切ではない指導や判断につながるのを避けなければならない。全学レベルで支援室を運営する場合はこの点について十分な準備をしてからになるが、全学レベルまで広げられない場合は、本学のように一部の科目に限定しての運用となるだろう。

また、評価をどうするかという大きな課題もある。授業で出された課題を他者と一緒に考えることが教育の質を向上させると捉えるならば、学修支援を活用したことを評価に入れることは可能であろう。本学では、2年間の議論を経て今年度から該当科目全クラスにおいて支援室の活用状況も評価に含めることにした。評価対象とすることで、授業時間外に課題について他者と対話する時間を確保することを重視していることを学生に示すねらいもある。評価の基準は教師によって違うが、支援室への訪問状況、課題ごとに初稿から最終稿までの文章の質の変化の過程、授業中の教師とのや

りとりでどこをどう直してきたのかを説明できるか、教師からのアドバイスを自分のことばで具現化できているか、などとしている。

5-2 学習者の理解の必要性

学習者の支援室に対する理解や教師以外の第三者と学修する力があることも学修支援を成り立たせる上で重要な要素となる。支援室で何を求めることができるのか、支援を受ける目的や支援室でやらなければならないこと、授業と支援がどう結び付くのかといったことを教師は授業で繰り返し声掛けをして理解させる必要がある。本学の場合は、第1回目の授業の30分程度を使って支援室の趣旨と使い方、約束事のオリエンテーションを行い、学期中は教師による声掛けや支援室でやることの指示を出してもらい効率的に支援が受けられるようにしている。教師が支援室を活用するようにいくら言っても、行かない学生も少数ではあるが存在する。授業時間外に行くのはめんどろ、忙しい、行きたい時間に支援が受けられないなどそれぞれに理由はあるようだが、周りの学生が行くのを見て来室するようになるケースもある。

5-3 TAの支援に対する理解の必要性

TAからは、授業と支援の違いについて問われることがよくある。本学の支援室では、授業と支援室の役割を明確にし、授業の役割は、学習内容とカリキュラム等の設定および学習者の問題意識の喚起と学びの材料を提供し導くこととしている。これに対し、支援は授業での学習をより深めるために個々の学習者に合わせてその自主的学習を助ける行為としている。従って、TAは書き手に対し、書き手の考えを否定したり、これしろあれしろとは言えない立場であること、書き手が自ら考えを引き出すことを助ける役割であること、文章の添削をする便利屋にはならない、といったことを厳守してもらっている。あるTAは文法を直してくれる、あるTAは内容を教えてくれるからそのまま書けばいい、ということになれば、学修支援そのものが成り立たなくなることを全員の共通認識として持つことが重要である。

6. むすび

学修支援の一つの形であるライティング支援室について課題を中心に述べてきたが、これ以外にも運営の維持など事務的な側面をどうするかなど、組織としての課題もある。しかしながら、支援を受けた学習者からは、日本のことをたくさん教えてもらった、色々な意見が聞けて面白かった、たくさん考えた、何回も直すのが大変だがTAと一緒にしてくれて助かった、など全体的な評価は悪くない。また、教員からも、支援を受けると教員からの助言や指南に対し、聞かれている理由の理解が早いので時間を有効につかうことができる、支援を任せることによって教師は思考整理段階での問題点や改善点を伝えることができたため、学生が文章をゆっくり推敲し改善する訓練ができたのではないかと思う、アウトプットするまでに時間がかかる学生は支援室でじっくり話を聞いてもらえるのはいいことだと思う、その他にも、支援室に行く学生と行かない学生では思考の訓練の積み重ねの差がでてきたように思う、といった意見が見られた⁽⁷⁾。試行錯誤しながらではあるが、6年目に入り、本学においてのライテ

ィング支援室の支援体制が確立されつつある。書き手の書く力の育成と支援をどう結び付けるかの議論を重ねることにより、学修指導や学修支援環境の整備が整っていくと思われる。

注

1. 「日本語作文演習」は授業内容の改定を受けて2013年度より「日本語文章表現演習」に科目変更している。
2. 大学機関によって名称は異なるが、代表的な呼称として「ライティング・センター」を挙げておく。
3. 松田(2012)によると、留学生を対象として日本語の文章の支援をしているのは、金沢大学、首都東京大学、龍谷大学、麗澤大学、早稲田大学である。
4. Teaching Assistant の略。チューターという言葉を使っている大学が多い。
5. 2013年度1学期の対象者は「日本語文章表現演習」を履修している1～7クラスの86名である。
6. クラスのレベルによっては最終稿提出の前には教師が文法チェックを受けるよう指示することもある。その場合は原稿にその旨分かるようにメモなどをし教師がTAに伝えるようにしている。
7. 2012年度1学期実施の自由記述式アンケート結果による。

参考文献

- (1) 大井恭子(2002)「思考力育成のための作文教育－外国語としての英語教育からの知見－」『千葉大学教育学部研究紀要』第50巻Ⅱ：人文・社会科学編，245-260
- (2) 佐渡島紗織，太田裕子編(2013)『文章チュータリングの理念と実践』ひつじ書房
- (3) 瀧澤博三(2013)「大学改革『質の時代』への転換 大学教育部会「審議まとめ」を読んで」私学高等教育研究所 アルカディア学報 日本私立大学協会 No. 486
- (4) 正宗鈴香(2012)「留学習者を対象として文章表現科目におけるライティング支援室の位置づけ－「書く」プロセス学習とライティング支援室の役割領域の視点から－」『麗澤大学紀要』第95巻，93-120.
- (5) 松田佳子(2012)「留学生を対象とした日本語ライティング支援室での個人相談の取り組み－自律的な日本語ライティング能力の育成を目指して－」『金沢大学留学生センター紀要』15:59-76